

ヴィルヘルム・ハイネ、
シーボルトの批判に耐えて
日本研究を重ねる

奥 正敬

■はじめに

日本で「ドイツ人のハイネ」と申しますと詩人のハインリヒ・ハイネを一番に思い浮かべますが、ここでお話をするヴィルヘルム・ハイネは、画家としてアメリカのペリー艦隊に乗り組んで日本に参りまして、江戸時代後期の日本の自然や文化や風俗を見事な絵に描いて世界に紹介した人物です。

彼はその後、絵画だけでなく日本を題材とした文筆活動を始めていきます。

■ドイツで革命に参加、鎮圧されてアメリカへ

ヴィルヘルム・ハイネ (Wilhelm Heine, 1827-1885) は、チェコに近い東部ドイツのザクセン王国の首都ドレスデンで生まれました。王立芸術学院で建築学を専攻しましたが、絵画に才能を発揮するようになり、俳優であった父の幼友達で、後に作曲家としての評価が高くなるリヒャルト・ワーグナーとも親密に付き合いしました。また、成績が優秀であったため、学院からパリ留学に派遣され、1848年に二月革命を見て帰国したと言われています。やがて革命の嵐はザクセン王国にも波及し、ハイネもワーグナーらと共に革命に参加します。しかし、プロイセン軍の支援を受けたザクセン軍はこの革命を鎮圧し、ハイネもワーグナーもパリに亡命しました。そして、ハイネは1849年にニューヨークへ渡りました。

ハイネのアメリカでの生活は苦しかったようですが、考古学者エフレム・スクワイヤに絵画の実力を認められたことにより、スクワイヤが代理大使となった中米の国々へアメリカ合衆国の外交官として赴任しました。その後、任務の傍らこの地域の風景や文化を描き、ライブチッピやニューヨークの出版社から数冊の書物にして刊行しました。

■ペリー提督に日本遠征への同行を志願

この頃、アメリカではマシュー・ペリー提督を指揮官として日本へ遠征することが話題になっていました。1852年、ハイネは外交書簡をワシントンのミラード・フィルモア大統領に届けた折に、同大統領に対し遠征に同行したい旨の希望を伝え、ペリー提督を紹介されます。ペリーは遠征が軍事的な性格の強いもので、他の学者たちの希望も断っているとしながらも、科学と芸術を担当する人員を確保するため、マスター・メイト⁽¹⁾と言う枠の中で、画家としてのハイネに許可を与えたのでした。

この時、ペリーが断った人たちの中に、ハイネと同じくドイツ圏のバイエルン生まれで、オランダ東インド会社の医師として長崎の出島に滞在し、幅広い分野の日本研究で大きな成果を挙げていたフランツ・フォン・シーボルト (1796-1866) がいました。しかし、彼は禁制品であった地図の海外持ち出しが発覚し、日本人関係者にも処罰者を出した、所謂「シーボルト事件」の首謀者として、徳川幕府から退去処分になっていました。⁽²⁾のちに、このシーボルトがハイネの日本観を厳しく批判することになります。

■まだ、写真が定着していなかった時代

ノーフォーク港をミシシッピー号単独で出発した遠征隊は大西洋を南下してケープタウンを経由、インド洋から東南アジアに入りました。ハイネの任務は既に始まっており、セント・ヘレナやセイロンなど、この艦の向かう先々で絵筆を揮っています。

香港で僚艦が結集して艦隊が整うと、ハイネはこの時点での旗艦であるサスケハナ号に乗艦しました。甲板にはペリーの配慮によって、木造のアトリエが作られていたそうです。この日本遠征には銀板写真の技術を会得した画家も同行していましたが、写真技術はまだ不安定な要素を抱えており、大航海時代やキャプテン・クックの活躍した頃と同様にアメリカ海軍の文字以外の視覚記録の主流媒体は、依然として絵画であったようです。こうしたことから、帰国後に報告書を作らなければならないペリーにとって、ハイネのような写実的な画法の即描画家は重要